

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：32605

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370728

研究課題名(和文) 新任中高英語教員の発達過程に関するケーススタディ：可能自己理論を用いて

研究課題名(英文) Case Study on Novice Secondary School English Teachers' Possible Selves

研究代表者

熊澤 雅子 (Kumazawa, Masako)

桜美林大学・言語学系・講師

研究者番号：20386478

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は教職課程在籍中の学生の英語教員としての未来像、特にコミュニケーション能力を育てる英語教育に関する理想的自己の変化を調査した。3名の研究参加者の大学2年次から教員赴任後の計4年間の変化を調査するため定期インタビュー等からデータを収集した。データ分析は質的手法を用い、possible selves theoryを理論的枠組みとした。最も重要な知見は、研究対象者が現実に直面し理想的自己の修正を迫られながらも核となる理想的自己は保ちその実現に向けて学びの必要性を感じ始めた点である。文部科学省が目指す英語教育の実践を可能とする教職課程、現職教員の養成システムのあり方に様々な示唆をもたらしている。

研究成果の概要(英文)：This study set out to examine the change in student teachers' future self images as English teachers, in particular, those as users of communicative language teaching. Data were collected from three participants for four years, who were initially preservice teachers in a university teacher training course but then became secondary English teachers. The collected data were analyzed qualitatively drawing mainly from narrative inquiry within the theoretical framework of possible selves theory. One of the most crucial findings of this study was that while these three participants all faced the need to modify their ideal English teacher selves, they all maintained the core of their ideal selves and started to feel the need for further learning in order to pursue their future goals. This finding along with others offers implications for relevant parties who collectively aim to help realize the ongoing MEXT curriculum reform toward more communicatively oriented English teaching.

研究分野：英語教育学

キーワード：teacher development teacher cognition teacher identity possible selves narrative inquiry

1. 研究開始当初の背景

(1)理論的背景

Possible selves theory (Markus & Nurius, 1986)は、未来の自己像が現在の心理・行動にもたらす影響に着目した理論である。具体的には、ideal selves that we would very much like to become(理想的未来の自己像)、selves that we could become(実現可能な未来自己像)、selves we are afraid of becoming(実現を恐れる否定的未来自己像)という3つの possible selves を概念化し、現在の自己イメージと肯定的未来自己像との差を埋める、また否定的自己像を避けるという動機が、現在の心理や行動に影響を与えると理論化している。外国語教育の分野ではこの理論を応用した L2 Motivational Self System が Dörnyei (2005, 2009)によって提唱され、研究開始当初、学習者のモチベーションへの新しい知見をもたらすグローバル化した現在に適合した理論モデルとして研究に応用されていた。

(2)社会的背景

近年の日本の英語教育では、文部科学省が先導するコミュニケーションを目的とした言語教育(Communicative Language Teaching、以後 CLT)に向けた改革が1980年代以来続いている。しかし、この教育改革に向けた理念と、入試を主な背景とした訳読を中心とする文法中心の教授法という現実との乖離により、この改革の実践への浸透は遅々として進まないことが先行研究で多く指摘されていた(e.g., Gosuch, 1998, 2000; Nishino, 2009, 2011; Underwood, 2012)。それらの文献で指摘されたのは、教員側の要因のみならず同僚や学習者や取り巻く社会環境から生じる外的な要因の強い影響である。

(3)上記背景と本研究とのつながり

研究代表者は、自身が過去に行った新任教員のモチベーションに関する長期的質的研究(Kumazawa, 2011)において、理想自己とモチベーションとの強い関係を発見して以来、教員心理及び教員の発達を理解する理論的枠組みとしてこの possible selves theory に注目するようになった。とりわけ教員が、学習者としての経験及び教職課程などから育んできた理想的自己教師像と、現実の様々な外的要因(同僚、生徒、さらにより広い社会的文脈など)によってもたらされる義務的な自己教師像との乖離を経験し、それにより急速にモチベーションが低下した点に着目した。そして、コミュニケーション力を高めることを目指した英語教育改革によってもたらされている理想と現実のギャップがもたらす教員心理への影響を、この理論的枠組みを利用して調査することとした。

2. 研究の目的

以上に述べたように、本研究は理論から実践

の場へと移行する新任中高英語教員を研究対象者とし possible selves theory を用いて、彼らの possible selves が教職課程を経て赴任後まで、どのように変化するかを調査することを目的とした。特に先述の研究で指摘された理想と現実とのギャップが新任教員に与える主に否定的な影響をその調査の軸においた。

3. 研究の方法

(1)研究手法

主な調査方法にケーススタディ(Yin, 2003)を採用し、新任教員のみならず、彼らを取り巻く環境(教職課程、初任校の教育環境及び同僚や生徒の英語教育に対する意識など)に関してもデータを収集し、新任教員が抱く自己像と外的要因との関連を取り込みながら考察を進めた。

(2)研究参加者の推移及びデータ収集の流れ  
当初3年の予定であったが、継続的な研究参加者の確保の問題で、4年間かけて最終的には3名の研究参加者のデータを収集した。以下が大まかな研究の推移である。

年度	研究参加者	データ
平成 25 年度	12名	アンケート、インタビュー 教職課程授業観察、教職課程担当者インタビュー
平成 26 年度	7名	アンケート、インタビュー 教職課程授業観察
平成 27 年度	7名+1名 <sup>(*)</sup>	アンケート、インタビュー 研究参加者授業観察
平成 28 年度	3名 <sup>(**)</sup>	インタビュー 研究参加者授業観察

<sup>(\*)</sup>教員になることが決まった同じ教職課程の1年上級の学生からデータ収集を開始した。

<sup>(\*\*)</sup>7名いた研究参加者のうち実際教員になった2名と27年度より研究参加者に加わった1名、計3名に対しデータを収集した。

研究参加者は全て研究代表者の勤務する大学の教職課程に在籍し英語教員を目指す学生であった。研究初年度大学2年生だった参加者にアンケートとインタビューでデータ収集を開始し、その後継続的にデータを収集したが、そのうち英語教員になった学生は2名のみだった。英語教員になる学生の数が少ないため、英語教員として内定していた同じ教職課程1年上の学生(研究開始時4年生)を途中から研究参加者としてデータ収集を開始した。

(3)データ分析

データは主に質的であったが、デジタル化した上でデータの種類に応じて複数の質的研究分析手法を使った。フィールドノーツや少数のアンケートは手動によるコード化(e.g., Miles & Huberman 1994)、研究対象者の複数のインタビューによって得られた

データは narrative inquiry (Riessman, 1993, 2008) を用いた。

#### 4. 研究成果

初年度の 30 名超のアンケート調査に始まり、最終的には 3 名の研究参加者の大学 2 年次から教員 1 年目までの 4 年間で収集されたデータを分析する中で得られた知見のうち主な 3 点について述べる。

##### (1) CLT への異なる理解

第一は、同じ教職過程に在籍する 3 人の研究参加者が CLT について異なる理解を有していた点である。先行研究(Nishino, 2009, 2011)では教職課程での CLT の教授不足が指摘されているが、本研究の学生の場合、教職課程である程度 CLT については学習していたものの、その解釈が個々の学生によって異なり、CLT を比較的深く理解する学生がいる一方で、浅薄な理解にとどまる学生や現実的に実現の難しい理想を抱く学生がいることが示された。ことに CLT に対する理想的自己を達成するうえで障害となるであろう外的要因に対する意識が、学生によって大きく異なっていた。

この点は、先行研究で指摘されたように CLT の明らかな教授不足だけが CLT の実践が進まない要因なのではなく、教授した内容の理解が学生によって異なるという新たな問題の可能性を提示している。この理解の差は、学生の英語学習者としての経験、英語学習の到達度、そして英語教育を取り巻く社会的要因への意識の差などから生まれていた。先述の 2 点は先行研究(Humphries & Burns, 2015; Nishino, 2009, 2011; 2012; Nishino & Watanabe, 2008; Taguchi, 2005)において現職教員の CLT の実践への取り組み度の違いの要因として指摘されているものと重なっているが、最後の外的要因への意識の差は教職課程の学生に固有のものであろう。本研究参加者のケースでは、この意識の違いは教職課程全体への積極性、参加度の違いから生じていた。従い今後への示唆として、教職課程で CLT を教授する際に学生個々の英語学習者としての差異、また教職課程へのアプローチの差異などを考慮し、特に理解が進みにくい学生に対する働きかけを工夫することの必要性が挙げられる。

##### (2) 「理想」と「現実」との差への対応

本研究のもたらした第二の知見として、教員になった研究参加者が現実に直面し理想的自己に基づく実践の修正を迫られた際の反応の相違が挙げられる。具体的には、理想と現実のギャップがあっても比較的早くその妥協点を見出し、ある程度初期から自分の目指す英語教育の実践を部分的にでも実施できた研究参加者がいたのに対し、理想と現実の狭間で試行錯誤を続ける期間が長く続いた教員もいた。

本研究の参加者のケースではこの違いの背景として、CLT に対して赴任以前にいかにか現実に即した理解をしていたかどうか等の研究参加者自身の要因と、赴任先の教育環境、生徒の状態など、外的な要因が影響していた。とりわけこの 3 名のうちの 1 人の研究参加者のケースは重要である。先行研究では、現職教員の possible selves は社会的要因や自己の理想などが働き合い変容を経験することが指摘され(Kubanyiova, 2009; White & Ding, 2009)、特に新任教員の場合、外的要因のプレッシャーから新任教員の心理には「なるべき自己」を表す ought-to selves (Higgins, 1987) が中心的に働くと指摘されてきた(Kumazawa, 2013)。しかし、本研究参加者の 1 人は、新任教員として現実の壁に直面しながらも、ought-to selves と ideal selves の妥協点を見つけ、ある程度自己の理想を保ちながら実践を続けることができると自己評価していた。このケースは、新任教員の self concepts における ought-to selves の中心性を否定する例として、教員の possible selves の理論に対して興味深い示唆を与えている。

また他の二人と彼が異なるのは、赴任校の環境や自己の英語学習や教職課程での学びから得た自信以外に、教職課程の時から比較的現実に即した理想を抱いていた点である。このことは教職課程の間から教育の現場に対する意識を高めることの必要性(Nishino, 2011, 2012)を改めて裏付けている。

##### (3) 長期的な理想的自己の耐性

最後の点として、3 人すべての研究参加者が理想と現実の狭間で、短期的な目標の修正をしつつも、長期的な理想的自己には大きな変化がなくその実現のために更なる学びの必要性を感じ始めたことが挙げられる。先に述べた現実に比較的早く対応していた教員は、大学時代からの英語学習の習慣を多忙な新任教員としての生活の中でも続け、自らの英語力を維持向上を計っていた。また、理想と現実の狭間で試行錯誤を繰り返していた 2 名の研究参加者は、新任教員研修の機会を積極的に利用し、実践的なアイデアを得るとともにモチベーションの回復にも役立てていた。さらに、そのうち 1 人は理想の英語教育の実現や自分の教員としてのキャリアを長期的に考えて、一時教職を辞してでも大学院の進学を考え始めた。これは教員の発達過程において赴任後の継続的かつ体系的な学びの提供の必要性を示唆しているといえよう。

##### (引用文献)

Dörnyei, Z. (2005). *The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition*. Mahwah, NJ: Erlbaum.

Dörnyei, Z. (2009). The L2 motivational self system. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language*

*identity and the L2 self* (pp. 9-42). Bristol, UK: Multilingual Matters.

Gorsuch, G. (1998). Yakudoku EFL instruction in two Japanese high school classrooms. An exploratory study. *JALT Journal*, 20(1), 6-32.

Gorsuch, G. (1999). Exploring the relationship between educational policy and instruction in Japanese high school EFL classrooms (Unpublished doctoral dissertation). Temple University, Philadelphia, PA.

Gorsuch, G. (2000). EFL educational policies and education cultures: influences on teachers' approval of communicative activities. *TESOL Quarterly*, 34, 675-710.]

Higgins, E. T. (1987). Self-discrepancy: A theory relation self and affect. *Psychological Review*, 94(3), 319-340.

Humphries, S., & Burns, A. (2015). "In reality it's almost impossible": CLT-oriented curriculum change. *ELT Journal*, 69(3), 239-248.

Kubanyiova, M. (2009). Possible selves in language teacher development. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self* (pp. 314-332). Bristol, UK: Multilingual Matters.

Kumazawa, M. (2011). *Vulnerability and resilience: Working lives and motivation of four novice EFL secondary school teachers in Japan* (Unpublished doctoral dissertation). Temple University, Philadelphia, PA.

Kumazawa, M. (2013). Gaps too large: Four novice EFL teachers' self-concept and motivation. *Teaching and teacher education*, 33, 45-55.

Markus, H., & Nurius, P. (1986). Possible selves. *American Psychologist*, 41(9), 954-969.

Miles, B. M., Huberman, A. M. (1994). *Qualitative data analysis* (2nd ed). Thousand Oaks, CA: Sage

Nishino, T. (2009). *Communicative language teaching in Japanese high schools: Teachers' beliefs and classroom practices* (Unpublished doctoral dissertation). Temple University, Philadelphia, PA.

Nishino, T. (2011). Japanese secondary school teachers' beliefs and practices regarding communicative language teaching. *JALT Journal*, 33, 131-155.

Nishino, T. (2012). Modeling teacher beliefs and practices in context:

A multi-method approach. *Modern Language Journal* 96(3), 380-399.

Nishino, T., & Watanabe, M. (2008). Communication-oriented policies versus classroom realities in Japan. *TESOL Quarterly*, 42(1), 133-138.

Riessman, C. K. (1993). *Narrative analysis*. Newbury Park, CA: Sage.

Riessman, C. K. (2008). *Narrative methods for the human sciences*. Thousand Oaks, CA: Sage.

Taguchi, N. (2005). The communicative approach in Japanese secondary schools: Teachers' perceptions and practice. *The Language Teacher*, 29(3), 3-12.

Underwood, P. R. (2012). Teacher beliefs regarding the integration of English grammar under new national curriculum reforms: a theory of planned behaviour perspective. *Teaching and Teacher Education*, 28, 911-925.

White, C., & Ding, A. (2009). Identity and self in e-language teaching. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self* (pp. 333-349). Bristol, England: Multilingual Matters.

Yin, R. K. (2003). *Case study research: Design and methods*. Thousand Oaks, CA: Sage

## 5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

Kumazawa, M. (2016). CLT in Japanese pre-service teachers' storied selves. *Obirin Ronko*, 7, 45-68. (査読なし)

Kumazawa, M. (2015). Communicative language teaching and secondary education in Japan: How to fill gaps between national policies and teacher agency. *The Journal of Language and Culture*, 2, 47-56. (査読なし)

[学会発表](計 5 件)

Kumazawa, M. (February 5, 2017). EFL teachers' changing views of CLT from pre-service to in-service period. 19th Annual Temple University Japan Campus Applied Linguistics Colloquium. Temple University Japan Tokyo Campus (Tokyo).

Kumazawa, M. (August, 23, 2016). Seeking space for teacher autonomy:

Japanese novice EFL teachers' struggle to implement CLT. Psychology of Language Learning 2, University of Jyväskylä (Jyväskylä, Finland).

Kumazawa, M. (February 21, 2016). Need for Space for teacher autonomy: A novice EFL Teacher's struggle to implement CLT. 12th Annual CamTESOL Conference, Institute of Technology Cambodia (Phnom Pen, Cambodia).

Kumazawa, M. (May, 16, 2015). CLT in Japanese pre-service teachers' storied selves. 9th International Conference on Language Teacher Education. University of Minnesota (Minneapolis, USA).

Kumazawa, M. (October 31, 2014). Communicative language Teaching and Secondary Education in Japan. The 2nd J.F. Oberlin University and Beijing Language and Culture University Symposium. Tama Academy Hills (Tama, Tokyo).

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕(計 0 件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

熊澤雅子 (KUMAZAWA, Masako)  
桜美林大学・言語学系・講師  
研究者番号：20386478